

「馬鹿者を命ず！」

最終回 悠太、馬鹿者になるその三 渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

前回までのあらすじ

麻衣から名女川と二人で小海島に移住すると告げられた悠太は、広岡の前で泣く。同じ日、二名島バッテリーの本社移転を翻意させるアイデアを持って会いに行った榎社長に、ライフスタイル研究所への参加を求められる。

「石 打くん、君は私が人生第四コーナーのライフスタイル研究所を起ち上げたなら参加してくれるか？」

榎は真剣な顔をした。

「これは冗談でも思いつきでもない。高齢者たちにとってどんな住まい方が最も安全、安心、快適なのか、終末までの幸せなライフスタイルとはどんなものなのか、人、モノ、カネを注ぎ込んで徹底的に検証し、世に提案してみたいとずっと考えていたんだ」

榎は自分のグラスに白ワインを注ぎ、悠太のグラスにも注ぎ足した。

「君が提案してくれたアイデアはなかなか面白かったよ。西朱雀地蔵通り商店街に開店する伊予南市のアンテナショップのモニターに、ネットで動画を配信し、集まってきた高齢者たちに『高齢者にとってどんな住まい方が最も安全、安心、快適なのか、終末までの幸せなライフスタイルとはどんな

なものなのか、一緒に考えてみませんか』と募集をかける。なるほどと思った。君のその発想と行動力を見込んで、どうだ？

うちに来てくれないか？」

「いきなり言われても……」

悠太はどきまぎして目を瞬いた。

「それはまあそうだな。一週間程度、時間をやるから考えてみてくれないか」

榎はグラスのワインを飲み干した。

「あの……それで……僕のアイデアですが、いかがでしょうか？」

「だから今、なかなか面白かったと言っただろう？」

「いえ……そうじゃなくて……伊予南市にとどまった方が二名島バッテリーにとって経済的メリットがあるという証拠になってくれたかどうか……」

「私が君のアイデアを聞いて、二名島バッテリーの本社工場移転を翻意する気になったかどうか聞きたいのか？」

登場人物

石打悠太 (いしうち・ゆうた) 25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

喜多嶋翔 (きたじま・しょう) 25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

シヨン・次川 (つぎかわ) 45歳、アメリカの投資ファンド、ウィンセント・ファンド副社長。

新庄誠人 (しんじょう・まこと) 39歳、伊予南市役所・地域振興課長を解雇され、伊予南プロジェクトの幹部社員となる。

花咲かえて (はなさき・かえて) 25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

堤誠一 (つづみ・せいいち) 71歳、元大阪の大手電機メーカー社員。再婚を決意し「バン焼き工房・まつしま」で披露宴を開く。

青山麻衣 (あおやま・まい) 24歳、悠太の元カノ。悠太をふっておきながら再び伊予南市にやってきて、悠太の仕事を手伝い始める。

名女川直行 (なめかわ・なおゆき) 27歳、麻衣の会社員時代の先輩で彼氏、麻衣を追いかけて……。

悠太はうなずいた。

「申し訳ないが、結論から言えば、ノーだな」

榎は表情を変えずに言った。

「ただし、誤解しないでほしいが、君が悪いわけではない。君のアイデアが力足らなかつたのではなく、本社工場のベトナムへの移転は決定事項なんだよ。すでにベトナム政府との間で移転についての覚書を交わし、再来週には正式発表を行う予定だ。移転計画と人員削減計画の作成にも着手した。ベトナム政府を巻き込んで、もう後戻りできないプロジェクトとして動きだしているんだ」

「そんな……」

「君はよく頑張つて、いろいろ考えてくれたよ。今聞かせてもらったアイデアはまさに出色の出来だ。しかし私は創業経営者だ。何があっても二名島バッテリーを衰退させなくてはならない使命がある。私情や感傷や思いつきで意思決定を曲げることはできないんだ」

「ということは……もしかして『伊予南市にとどまった方が二名島バッテリーにとって経済的メリットがあるというアイデアを出してくれたら、移転を撤回するかもしれない』と言われたのは……あれは嘘だったのですか」

「申し訳ないな」

榎は頭を下げた。

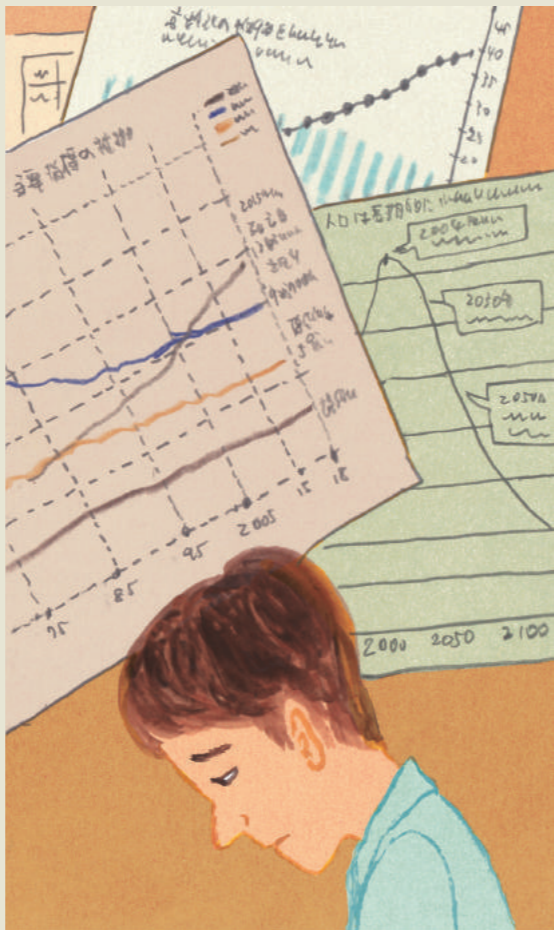
「そう受け取ってもらってもいい。初めから移転を撤回するつもりは万が一にも無かつたよ。私が宿題を出せば、君は必死になつて何かを考えてくれるだろう。それが楽しみだったものでね。つい君を騙すようなことを言ってしまった」

悠太は大きくため息をついた。怒りよりも希望が完全に途絶えてしまった脱力感でこの場に横になりたかつた。

「石打くん、君は日本人の平均年齢が何歳か知っているかね」

悠太は無言で首を横に振つた。

「四十六歳だ。世界の平均年齢は二十八歳だから十八歳も上なんだ。日本人の平均年齢は世界一高いんだよ。高齢化率つまり総人口に占める六十五歳以上の高齢者の割合も二十八・一％と世界一だ。そして、そんな超高齢社会の日本が次に経験するのは世界の歴史でも類がない人口の急激な減少だ。日本人の総人口はすでに二〇一五年を境に減り始めたが、その減り方には年々加速度がつき、二〇一五年に一億二七〇〇万人だった日本の総人口は四十年後には九〇〇〇万人を下回り、一〇〇年も経たないうちに五〇〇〇万人ほどに減ってしまう。この間、二〇二四年には三人に一人が高齢者



になり、二〇二五年にはそれまで人口が増えていた東京でもついに人口が減り始める。私が何を言いたいのか分かるか？」

「いえ……」

「そんな日本にいる限り、二名島バッテリーは近い将来、成長の壁にぶつかり、衰退せざるを得なくなってしまうということだ。人口の減少は国内需要の縮小による売り上げ減をもたらすだけでなく、労働力の確保も困難にさせてしまう。二名島バッテリーは電池という大量生産を前提とした商品を作る会社だ。人口減はとりわけ致命的になりかねないんだよ」

「だから、まちおこしで人やお金を集めて……」

「君はまだ私が言っていることを理解していないようだ。日本が直面しているのは伊予南という一地域の問題ではないんだ。

数年後の二〇二五年には東京でさえも人口が減り始める。つまり日本のあらゆる自治体で人口が減るんだよ。私の娘もそうだが、自治体の首長は口を開けば『まちおこしで人を呼び込み、移住してもらおう』などと言

いたがる。しかし、今や『まちおこしによって人口が増えた』だの『まちおこしに力を入れないと人口が減ってしまう』だのと一喜一憂しているような呑気な状況ではないんだ。少なくとも二名島バッテリーが生き残り、成長を遂げるためにはこれまでの発想を変えないと駄目なんだよ」

榎は気持ちを落ち着かせるように自分のグラスに白ワインを注ぎ、悠太のグラスにも注ぎ足した。

「その点、ベトナムは超高齢社会の日本とは違い、平均年齢が約三十歳と比較的若い国だ。労働者はおしなべて勤勉だし、優秀な人材も少なくない。人口は九〇〇万人を超え、近い将来、日本を追い抜くだろう。投資対象としてはなかなか魅力的だ」

「榎さんはまちおこしなんて無駄だと言いたいんですか？」

「そこまでは言っていない」
「でもそう聞こえます」

コーナーのライフスタイル研究所は何人ぐらい採用するお考えですか？」

「当初は二十人程度だろうな」

「二十人……」

悠太は唇を噛みしめた。

「君が何を思ったのかよく分かるよ。二名島バッテリーの本社工場が雇用している従業員に比べたら微々たる数だ。本社工場の移転で伊予南市が失う雇用の一％も埋められない。そういうことだろう？」

悠太はうなずいた。

「私が十坪ほどのバラックの工場うらばで二名島バッテリーを創業した時、従業員は三人だった。その時に比べればはるかに恵まれたスタートだ。それだけじゃない。懸命に頑張った成果を上げられれば、日本国中はもとより世界中から研究者を集められるかもしれない。言い忘れたが君にはそれなりの好条件を用意するよ。君が今、受け取っている給料の倍を保証しよう。住宅も提供する。君が私の事業に加わってくれたら、薫子も喜ぶんじゃないか？」

「そ……それはないと思います」

「なぜそう思うんだ？」

「とにかく……考えさせてください」

事務所兼社宅には麻衣も名女川もいなかった。人気のない畳部屋に大の字になった

「数年後には東京も含めてあらゆる自治体で人口が減ろうとしている時に、『まちおこしによって人とカネを他の地域から呼び寄せよう』などというゼロサムゲームをしたところで、いくらかの時間稼ぎにしかないのではないかと言っているんだ。そう思わないか？」

悠太は答えずにワインを煽かった。名の通った美味しいワインなのだろうが、味はよくわからなかった。

「ただし、だからと言って、まちおこしが無意味だなどと言いたいわけではない。誤解するなよ。私は『まちおこしは目的とやり方が大事なのではないか』と言いたいんだ。その良い例が君のアイデアだよ。『高齢者の幸せなライフスタイルを一緒に考えてみませんか』とネットの動画で募集をかけ、この伊予南に高齢者を集めて研究、検証し、世に問う。それはとても意義深いことだと私は思う。飲めよ」

榎は悠太が飲み干すのを待って、グラスに白ワインを注いだ。

「私たちは老いや人口の減少をどう引き受けたらいいのか。それらを受け入れるだけでなく、少しでもプラスの方向に持つていくためにはどうしたらいいのか。そのためにはどんな技術や仕組みが求められるのか。人、モノ、カネを注ぎ込んでそれらを研究、

悠太はため息をついた。

榎は初めから移転を撤回する気などまったくなかったのだ。しかし騙されていたというのに不思議と怒りは覚えなかった。それどころか二名島バッテリーの行く末を何よりも大切に考える経営者として姿勢には潔ささえ感じられた。

悠太は榎の申し出をどう受け止めたらいいいのか考えた。

人生第四コーナーのライフスタイル研究所は二十人ほどの規模でスタートさせると言う。二名島バッテリー本体に比べたらごく小さな事業だが、いずれは大きく化けるかもしれない。榎ほどの起業家が人生最後の目標だと言っているのだ。その可能性は十分にあるだろう。

僕はそのプロジェクトに加わるべきなのだろうか。まちおこし特命社員としてもらっている給料の倍を出すというのは魅力的だけれど、僕がすべき仕事なのだろうか。

それにまちおこしによって人を呼び寄せたり名産や特産を買ってもらったりしようとする努力は、本当に榎が言うようにゼロサムゲームで、いくらかの時間稼ぎにしかならないのだろうか。

ケータイが鳴った。四分地からだった。

「君は梅代の町を知っているか？」

四分地は挨拶も前置きもなしにいきなり

検証することは、私たちが直面している歴史上類例がない国難に抗う重要な手段になるかもしれないだろう？ それだけじゃない」

榎は遠くを見つめる目をした。

「そんな私たちの取り組みは、日本を追いかけるようにして高齢化が進む他の国の人々にとっても貴重なヒントを与えられるかもしれない。以前、君に話したかな？

高齢化は実は地球規模の課題で、例えばヨーロッパを見ると、ドイツやイタリアは高齢化率が二十一％を超え、すでに超高齢社会に入っている。フランスやイギリスも間もなく高齢化率が二十％を超える。さらにお隣の中国では六十歳以上を高齢者とみなしているようだが、この人たちが今や二億人に達していて、二〇三五年には四億人に増える見込みだそう。つまりいずれ世界中の主だった国々が老いや人口減に見舞われるんだよ。言うことは私たちの取り組みは伊予南という一地域はおろか、日本をも超える広がりを持つているわけだ。そこで……」

榎は紙ナプキンにケータイの番号を書いて悠太に渡した。

「私へのホットラインだ。どうするか決心がついたら電話してくれ」

「あの……榎さんが言われている人生第四

言った。

「いえ……？」

「上越新幹線の越後湯沢駅から車で一時間半ほどのところにある山間の集落だ。近くにある梅の山温泉は、秘湯マニアには有名ならしい」

「あの……何の話ですか？」

「まちおこし特命社員として梅代に赴任してもらいたいんだ」

予想もしなかった突然の話に悠太は絶句した。

「君は伊予南市では予想以上によくやってくれたよ。君が企画した伊予南フェアはいよいよ準備が佳境に入っていて、なかなか良いイベントになりそうだ。その経験を今度は梅代で生かしてもらって、さらに経験と見聞を積んでくれ」

「あの……いつの話ですか」

「梅代町長が一刻も早く君に会いたいと言っているんだよ。今から来いとは言わないが、明日、東京の事務所顔を出してくれないか。その足で梅代に赴任してくれればなおありがたい」

「ちょっと待ってください。いきなりそんな……それに荷物だって……」

「鞆に入らない物は後から喜多嶋に送らせるよ。取りあえずは着の身着のままで行ってくれ」

「あの……一つ聞いていいですか？ まち

おこしは本当に必要ですか？ ある大企業の経営者がこう言ったんです。『まちおこしで人を呼び寄せてもいくらかの時間稼ぎにしかならない。日本の人口はこの先どんどん減っていくのだから、ゼロサムゲームをしても無駄だ』って」

「無駄かどうかやってみなければ分からないだろう」

「でも、それを言ったのは二名島バッテリーの創業者の榎社長なんです」

「得たモノが大きな人間は、失うリスクを第一に考えるようになるんだよ。徒手空拳のお前には失うモノなんかないじゃないか。小賢しいことを言っていないで馬鹿になれ！ まちおこしで地域が豊かになれば、『子どもが生まれたら一〇〇〇万円の御祝い金を出す』なんてこともできるようなものかもしれない。未来は変えられるんだよ」

四分地は電話を切った。

夕刻、伊予南駅まで十五分ほどの道のりを足早に行き、駅構内のコンビニで五目弁当と缶ビールのロング缶を買った悠太は、事務所兼社宅に戻り、五目弁当をつまみにビールを飲んだ。

思い返せば伊予南市にやってきた初日、こんなふう一人で夕食を食べたのだった。

仕事ができても本当に嬉しく思っています。あちらに行っても時々、その……僕のこととも思い出してくださいね」

一カ月後――。

山深い梅代の集落にも初夏が訪れようとしていた。周囲の山々は鮮やかな緑を湛え、アスファルトの道路の向こうには陽炎が立っている。

町役場での打ち合わせを終え、事務所兼社宅として使っているリゾートマンションの一室に戻って来た悠太は花咲かえでからメールが届いているのに気づいた。

かえでは先週、西朱雀地蔵通り商店街で開催された伊予南フェアの写真のデータを送ってくれたのだった。

伊予南市で取れた野菜や果物が並ぶ八百屋の店先や、穴子などの海産物を提供している寿司店の店内、人が詰めかけている伊予南市のアンテナショップの様子など、写真はどれも伊予南フェアの盛況ぶりをよく伝えていた。

かえでのメールにはこう書かれていた。「おかげさまで伊予南フェアは大成功でした。期間中、目標の二倍を上回る来場者が訪れました。百貨店や大手スーパーのバイヤーもいらっしやあって、伊予南の食材を扱いたいとの連絡もいくつかもらっています。

その後、喜多嶋と麻衣と名女川がやってきて賑やかになったが今は誰もいない。

悠太は榎の提案についてまた考えた。

客観的に見れば、美味しい話だと思う。

今の二倍の給料と住宅の提供を保証してくれると言うのだ。しかも二名島バッテリーという大企業がライフスタイル研究所の後ろ盾になってくれるので、調査・研究資金はきつと潤沢だろう。

それでも悠太の心は決まりかけていた。

僕は馬鹿者であり続けよう。

どんな地域にも宝物が埋まっている。まちおこし特命社員としてそれを掘り起こす仕事を続けよう。

「掘り起こしてどうなる」などと小賢しく考える必要はない。馬鹿になって懸命に掘り起こしてやれば何かが生まれるはずだ。もしかしたらその繰り返し先の先に榎が言っていたのとは別の未来が見えてくるかもしれない。

悠太はリュックからケータイを出し、紙ナプキンに書かれた榎のケータイ番号を押した。

榎は出なかった。時刻は午後十時を回っている。もう横になったのかもしれない。

悠太は榎にメッセージを送った。

「僕のような若輩者を、新たに立ち上げるライフスタイル研究所に招いていただいて

またアンテナショップで流した堤誠一さんのご結婚式映像も好評で、伊予南ツアーへの参加者が五十人を超えました。来月からはいよいよ石打くんが言っていた『高齢者のライフスタイルを一緒に考えてみませんか』と訴える人材募集の映像が流れます。夏には古民家を改修した宿泊施設もオープンします。そちらはどう？ 石打くんのおそうの活躍、期待しています」

悠太は安堵の溜め息をついた。二名島バッテリーの移転で伊予南はこれから大変だけれど、まちおこしについては着実に前に進んでいるのだ。

来訪者を告げるブザーが鳴った。

悠太はモニター画面をつけて、来訪者を確認した。

スーツケースを携えた女性が玄関前に立っていた。

麻衣だった。

悠太は一瞬、我が目を疑ったが、間違いはない。麻衣がやってきたのだ。

悠太はドアを開けた。

「どうしてここが……？」

「会社に聞いたのに決まっているじゃない。ねえ、しばらくここにいさせてくれない？」

「小海島の家は？ 名女川さんは？」

「飛び出してきた。あいつ、島に移住して一週間も経たないうちにスナックの女を口

光栄に思います。でも、僕はまちおこし特命社員として馬鹿者であり続けたいと思います」

少し考えてから、もう一通、メッセージを送った。

「余計な口出しですが、シヨーン・次川さんをお誘いするのはどうでしょうか。次川さんは事情があつてヴィンセント・ファンドを辞めるかもしれません。次川さんが榎さんの事業に加わったら、薫子さんも喜ぶと思います」

午前九時、悠太はノートパソコンや地図など取りあえず必要なモノをリュックに入れて、事務所兼社宅の引き戸を開けた。寂しさと切なさで胸が一杯だが、振り返らなかった。

冠木門の扉が開き、新庄が入ってきた。

「石打くん、もう出立ですか？ 寂しくなりますね」

悠太は新庄がなぜ知っているのか、と言う顔をした。

「昨晚、西朱雀プロジェクトの四分地社長からお電話をいただきました。次の赴任地は梅代だそうですね。南国から雪国ですか」

新庄は右手を差し出した。

「石打くん、君は優柔不断でおっちょこちよいのところもありましたが、今は一緒に

説いたのよ」

悠太は麻衣の顔をまじまじと見つめた。

「ここは狭いから」と言っても引き下がるような女ではない。言い出したら聞かないのだ。(二)

まちおこし特命社員
石打悠太
「馬鹿者を
命ず」



Kazubiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト・大正大学表現学部客員教授。

1959年、横浜市生まれ。日経BP社で『日経ビジネス』副編集長、

『日経ビジネスアソシエ』創刊編集長、『日経ビジネス』発行人などを務めた後、2014年3月、独立。

1997年に長編ミステリー『錆色（さびいろ）の警鐘』（渋沢和樹の筆名、中央公論新社）で作家デビュー。

著書に『罪人（とがびと）の愛』（幻冬舎）、『稲盛和夫 独占に挑む』（日本経済新聞出版社）、

本名・渋谷和宏で『文章は読むだけで上手くなる』（PHPビジネス新書）など。

TV、ラジオでコメンテーター、メインキャスターも務める。